

『死神の理りと人間の誉れ』

—ドイツ人文主義の濫觴—

一四〇〇年八月一日、ボヘミア西北部エーガー河畔の国王都市ザーツの町で、マルガレーテという名の一人の女が恐らくは産褥熱の為、幼い子供達を残して他界した。当市の書記役であり学校長でもあった夫ヨハネスは、その死を悼み、その不条理を難じて、一篇の散文を草し鎮魂の書とした。今世紀に発掘された一通の書簡から、その成立が同月二三日以前と推定されるこの書は、その後『ボヘミアのアッカーマン』と通称されて揺籃本時代に流布し、今日ではドイツ初期人文主義の代表作、あるいはルター以前の最も優れた初期新高独語散文とみなされている。本稿は既に種々の角度から論及の対象となっているこの書の全貌を改めて

新井皓士

とらえ、同じく十五世紀に多様な痕跡を残した「死の舞踏」及び初期の散文作品として『アッカーマン』と並び称されるアルブレヒト・フォン・アイプの『婚姻是非論』との関連に於いて、その特性を解析しようとする試みである。

さてユウリス暦一四〇〇年は、時の人にならえば「世の始まりより数えて六五九九年、人の子の生まれ給いしより千四百年」であり、ローマ教皇庁のいわゆる「ヨベルの年(祝年)」であった。既にカトリック教会は一三七八年以来、ローマとアヴェニョンに別個の教皇を戴く大分裂時代に入って久しいとはいえ、ダン

テが「人生行路の半ば」に暗闇の森をさまよひ三界を旅した一三〇〇年にゴニファティウス八世教主によって創設されたこの百年毎の祝年には、格別効能ありとされる祝年贖宥状を求めて七つの丘の都を訪れる巡礼はなお少なくなかった。

一方この年八月、アルプスの北、ドイツの地では、いざれローマ遠征を果たして「神聖ローマ」皇帝位に就くはずであった国王ヴェンツェルが、三四年の在位の末に王位を剝奪されるという異常な事態が起こった。国王としての統治の責めを怠ったこと、教会大分裂を回復する為の努力を怠ったこと、そしてヨハネス・フォン・ネポムクを始めとする聖職者虐待の科、これがライン流域の四選定侯があげるヴェンツェル罷免の表向きの事由であった。後任には結局彼らの内部よりプアルツ選定侯ルブレヒトが選ばれるが、国王戴冠は正統的アーヘンの地ではなくケルンで行われ、ローマ遠征もまた成就せず、ヴェンツェル、ルブレヒトと二代のドイツ国王（ローマ王）は正式には「神聖ローマ皇帝」を名乗ることはなかった。人はこれを教皇と皇

帝を頂点とする中世的世界の理念の、現実における矛盾露呈の一端とみることもできよう。

ドイツ国王位を剝奪されたヴェンツェルはしかし、二歳の時戴冠して以来のボヘミア王位を一四一九年に没するまで辛うじて保っている。約二百年後ルドルフ二世がやや似た軌跡をたどるのだが、精神思潮史上このヴェンツェル王の在位時代にボヘミアの民族意識が高まり、一三四八年創設のブラハ大学からドイツ系の教師や学生が一斉退去してライプチヒ大学創設（一四〇九年）に至ったり、フス派の信仰運動が高まりつつあったことを忘れることはできない。ヴェンツェルの父カール四世がブラハを王城と定めて以来、ボヘミアには神聖ローマ帝国の他の地域にはみられない異文化間の緊張と刺激があったのである。『アッカーマン』の作者ヨハネスはこのボヘミアの、ドイツ系の多い西部の小邑テンプル（マリーエンバート近傍、現テブラ）に一三五〇年頃生まれ、一三七八年より一四一一年までザーツで市書記、公証人、学校長として活動し、その後ブラハ新市の書記長となって一四一四年に没した

と推定されている。

問題の書『アッカーマン』は、「アッカーマン」を名乗る人間と死神が奇数章と偶数章に分かれて交互に論争する三二の章と、神による裁定の第三三章、そして亡妻を哀悼し冥福を祈る直接的ネクロロークの章から成る。この最後の章については『一橋論叢』第六七巻第二号に橋本郁夫氏によって詳細に論じられており、もはや贅言を要すまい。その主旨はこの最終章「最後の祈り」が、アクロステイヒョン、即ち折句ないし沓冠(くつかむり)の修辭法によって作者ヨハネスの名を明かし、その妻の名マルガレーテもまたここに完全な形で明らかにされていること、また三四という数が「三三と同様、キリストの生涯の年と関係」する重要な象徴数であり、作者の尊敬するプラハの文人宰相ヨハン・フォン・ノイマルクトの『神との親しき語らいの書』とも関係するところからも、「一見枠外にあるように見えながら……内容的にも形式的にも……なるべくしてなった」第三四章である事の論証にある。

『オイレンシュピーゲル』の場合もそうだが、アクロステイヒョンによる作者のカモフラージュは、少し環境が異なると半世紀も経たぬうちに一般に理解できぬものとなり、誤解ないし無頓着のうちに伝播、複製されて後世に謎を提供することが多い。『アッカーマン』には十六の手写本と十七の古版本が存在するが、現存する最も古い写本は一四四五年のハーゲナウの写本書肆ラウバーの広告に載せられたもの、最古の印刷本は一四六〇年及び六三年頃の両バンベルク本、次が一四七三年のバーゼル本で、以後少なくとも印刷本に関しては揺籃本時代は圧倒的にバーゼルとシュトラースブルクを中心とする上ライン地方で刊行されている。このバーゼル本のファクシミリ版などを見ても、最終章のアクロステイヒョンには全く注意が払われていないのである。諸家の校訂・再建テキストの中ではクロークマンのそれがアクロステイヒョンを最も明晰に示すものとして定評を得ている。

全編はアッカーマンによる死神に対する激越な弾劾、

「諸人の残忍な抹殺者、全世界の悪辣な迫害者、善人の残酷な殺害者、死神よ、御身に呪いあれ」という言葉で始まる。叫び、手をすりあわせるように、身をよじるようにして行われる叫喚告訴の形をとり、言葉は三重の輪をえがき畳みかけるようなりズムで連なっている。怒りと慟哭を露にするアッカーマンに対して、死神は「前代未聞の談判だが」と冷笑しつつ、無差別・平等な死神の業を「平仄も韻律もなしに」告訴する。「こせがれ」は何者かと問う。両者の地位ないし力関係は明かで、アッカーマンが死神に敬称(D)を使うのに対し、死神は自らいわゆる尊貴の複数(MH)を用い相手をば「そち」(DE)扱ひする。第三章、「私はアッカーマン(農耕者)と呼ばれる者、鳥の羽から成るが私の鋤具、住むはボヘミアのくに」という答から筆耕生ともいふべき作者の姿が浮かびあがるが、農耕者は人祖アダム以来の人間の象徴でもある。続く「御身は私の喜びの宝、第十二番目の文字をアルファベットから残酷にも奪った」云々は、IとJ、UとVが共通で、Xを使わなかった当時のアルファベットにおける

M、すなわちマルグレーテを意味し、同様の手法は次章で死神がザーツを暗示して「一八、一、三、二三」の四文字から成る堅固で美しい町という時繰り返される。ボヘミアではさほど手荒な事はしていないが、といいつつ死神はその町で、十二番目の文字の「善れと浄福に恵まれた女に慈悲を与えた」と述懐。亡妻を讃える死神の言葉に感情の一段激したアッカーマンは、「ヘル(主)」と相手を呼び、自分こそその夫だった、「ここに私、哀れなアッカーマンは一人立つ」と、ルターないしファウストを想起せしむる言を吐き、妻を絶賛した挙句に再び激しく死神をののしる。

死神はむろん人間と対等の裁きの場に立とうとはしない、「主は主で、僕は僕」であるから。しかし己が、公正に思慮し裁き行動していることを説き、身分も才能も美醜も年齢も関わりなく、太陽が善悪等しく照らすように、何人をも差別しないことを述べる。医薬も甲斐無く、国王も教皇すらも容赦ない。身のほどをわかまえ、ののしりをやめよ、「頭上に刃を向けることなかれ、破片が目に入らぬよう。」

この第六章に典型的にあらわれる思想は、いわゆる「死の舞踏、死神踊り」(Podestanz, Dance macabre)として十五世紀から十七世紀にかけてヨーロッパ各地で(パリのフランシスコ派修道院墓地拱廊に始まり、バーゼルのベネディクト修道院回廊、ルツェルンのシユプロイ橋、リューベックのマリア教会、レヴァルのニコライ教会などの壁画、その他、英、伊、西、ハンガリーなど各国にわたる。また一方でホルバインやマヌエル・ドイチュなどの芸術作品として)好んで形象化されたものであることは言うまでもない。パリのそれは一四二四年に描かれ一四八五年にその模写が印刷されたが、これと並んでこのジャンルの起源の一つとみなされる「四行詩による上ドイツの死の舞踏」(ハイデルベルク大学図書館蔵)テキストは、十四世紀半ばに遡るとされ、「ヴェルツブルクの死の舞踏」とも呼ばれる。これは死を目前にした二四身分の人物独白(二行のラテン語と四行のドイツ語翻訳)から成るもので、後から死神の勧誘四行がそれぞれ付け加えられ

一四六五年のハイデルベルク版木本になる。但しこの独白体には更にその淵源があり、いわば死の平等を背景にした身分尽しとして十三世紀来流布した、『死を待つ我は (Vado mori)』がそれであるという。

いずれにせよヨハネスが『アッカーマン』を書いた時点では、現在知られている形での「死の舞踏」は存在しなかった可能性が強いと思われるのだが、今世紀に入ってブラハで発掘されたある古写本の合冊本が興味ある事実を提示したのであった。即ち六八葉から成るこの合冊本は、恐らく十四世紀後半に数人の手で筆写された七編の作品を含むのだが、その中にごく短いはいえ「死神の酷さ」を論ずる韻文及び「死を待つ我は」に類するものがあり、且つこの合冊本がかつて「デーブルのヨハネス」所有であったと推定しうる書き込みがあったのである。とりわけ各節七行、全二六節の押韻ラテン詩である前者は、注意を喚起する指印が三カ所に書き込まれ、訴人と死神の応酬形式や個々の内容的対応から、ヨハネスが「アッカーマン」創作にあたって参照した確率は極めて高い。後者について

は手元に資料がなく判断を保留せざるをえないが、この合冊本を研究したカレル・ドスコチルは同合冊本中の「現世の軽視」(聖ヘルナール)も『アッカーマン』第二章の重要な典拠とみなしている。

「死を忘れるなかれ (Memento mori)」という古来の警句が、「死の舞踏」という表象に変換する間に、一三四八年に始まり十七世紀に至るまで繰り返しヨーロッパを襲った黒死病(ペスト)があることは疑あるまい。とりわけその最初の流行の猛威は、各地の年代記に記され、ボッカチオの『デカメロン』第一日にまざまざと描かれている。一方でユダヤ人迫害、鞭打行者、舞踏病といった病理的社会現象が発生する傍ら、十四世紀から十五世紀にかけて総体的人口は激減し、しかもそれと逆比例するように都市数は増加して結果的に農村衰退および中世後期の農業危機をまねく。このような異常はすべてを疫病蔓延に帰することはできないにせよ、それと大きな関連があることは言を俟たない。これを日常次元でいえば、死が賢者の言や牧師の説教にとどまらず、圧倒的に身近なものとして遍在したの

である。時には埋葬すら満足に行なわれず、何年後かには満杯の墓地から遺骨が掘り起こされ洗い清められて納骨室へ移される。骸骨はほとんど日常的存在であった。「死の舞踏」に描かれる死神は、あるいは大鎌を、あるいは笛や太鼓を、あるいは砂時計を持つ骸骨の姿をとるのが一般的であった。

だがアッカーマンは屈しない。亡き妻について既によくの比喩が玉を連ねるように用いられてきたが、死神の最初の反撃を受けとめる第七章では「誉れ高い鷹が飛び去って帰らず」という言葉で始まる哀惜と賛美を重ね、被造物すべての憎しみ、三界の恨みを死神に集めようと試みる。この「鷹」の一句は明らかに「ミンネザングの春」に名高いキューレンベルクの詩を踏まえたものであろう。対するに死神は言う、天上は精霊が、地獄は悪霊が、そして地上は死神が世々これを統べるべく定められたのは神だ。過剰なものを一掃するのは死神の務めにして、そも人祖以来死滅する者がなかったら地上世界はどうなっていると思ふのか、と。

人口圧、食料生産性と人口問題は現代にもつながら、死神の言い分には反論を許さぬ一面の真理がある。それゆえ「愚か者」と揶揄されるアッカーマンに直接の反論は不可能で、彼はひたすら情に訴え、「天の伯」神の復讐と懲罰を願い、また神に与えられた伴侶より得た喜びを称えて、「この回春の泉(Jungbrunnen)」の水を汲まぬ「愚か者」に何がわかるか、と応酬する。その言葉から「知恵の泉」の水を飲んだことがないと知れる、と死神に決めつけられても、アッカーマンはなお三つ重ねの修辞法で妻を讃え死神をののしるのである。

と、地上のものはすべてうつろいゆく定め、という一般論だけでは埒が明かないとみた死神は突如論法を変えて問う、お前の妻は初めから「純にしてしっかり(rein und frum)者」だったのか、それともお前がそのようなように仕立てたのか、と。初めからなら同じような善き女が他にも居よう、お前の力のせいなら再び育てることもできよう、いずれにせよ、執着を捨てよ、愛の果ては苦しみ、喜びの果ては悲しみ、これが地上の

定めなのだ、と。「痛手の上に嘲笑」を受けた第十三章のアッカーマンは、己が愚を認め、ほとんど反論らしい反論もできないが、それにも拘らず「御身が私の眷れの略奪者、喜びの窃盜者、良き暮らしの盗人……」であることを知っている。身は寡男に、子らは母無し子にされたことをひたすら嘆き「契りを毀つ」死神の無慈悲を嘆く。激越な調子は衰え死神は再び「ヘル」と呼びかけられている。

第十四章の死神はこれを受けて、嘲るよりは論すように、愚かな論議は結局争いとなり敵意をあおり後悔を招く、と言い、人生の盛りに死ぬことこそ幸せ、いかに富を積もうと老醜の重荷に喘ぐ者は惨め、と説く。そしてここに冒頭で引用したマルガレーテ他界の日付「世の始まりより数えて六五九九年、人の子の生まれ給いしより千四百年、天国の門番の解放の祝日」が明らかにされ、彼女が「天国への道が開かれている年」に「永遠の喜び、永久の命、果てることなき平安に」至るよう配慮したのだと死神は述べるのである。「天国への道が云々」はむろん祝年を意味しているが、「六

五九九年」とは、天地創造よりノアの洪水までを二二四二年、それよりアブラハムまでを九四二年、以下ダヴィデまでを九四〇年、バビロン捕囚までを四八五年、キリスト誕生までを五九〇年と数え、更に千四百年を加えたもので、当時はこの程度の年数が世界の年齢として一般に信じられていたのであり、たとえば約百年後の『シェーデル世界年代記』もこの数を記載している。もっともコロンプスの航海とほぼ同時期にこの書を書いたシェーデルは、これより一三四六年少ない別説も併記して暗にこの年数が不確実であることを示しているが。

次章(十五)でアッカーマンが「おためごかしの口説は罪人のもの」と言ふのは、死神が前章で「お前の魂が天国で彼女の魂と、また肉体は地下で彼女の骨に添えるよう、我らが保証しよう」と、いわば示談の姿勢を示したことに反駁したものである。ここでアッカーマンは一方で神の慰めと助けを求めつつ、他方では死神の正体を聞きだそうとする。答える死神はアッカーマンの告訴が誤りであり不当であることを示すべく、

その素性ないし本性を傲然と開示する。それは「われこそは告(の)らめ家をも名をも」といった勢いの、死神の優位を示すと同時に、死神がついにアッカーマンと同じ裁きの場に立ったことを意味する。「我は神の物の具、死の主、仕事正しき草刈人なり。我が大鎌は彩り鮮やかに輝ける花をも草ももれなく刈りて(……)そが前に色も香りも甘き汁も無益なり」、等々。列挙される色彩は白、黒、赤、茶、緑、青、灰、黄で、高貴な紫が欠けているが、その後唯一の花の名として堇があげられている、第十章の百合およびバラとともに、スマレは当時の嗜好に最もかなった花であった。「死神は更に続ける、「我は無にして有なり、(……)諸人の宿命なり、(……)、わが仮の姿はローマのさる神殿に描かれるもの(……)、我に出自なく、遍在にして非在なり(……)、コノ実ヲ求メル日ヨリ汝ラニ死アルベシ、と言われし時より、我は地と空と海の領主(……)、我らが世の役に立つ所以は汝すでに聞きたり(詮議立てを)止め、我らが温情ある取り計らいに感謝せよ」と。

死神が同じ土俵に降りてきたことで、十七章のアカカーマンはただ呪い嘆くだけではなくなり、圧倒的な相手の「異な話」に含まれる矛盾をつこうとする。公正を装う死神の仕事が実は不公平ではないのか。花を刈るともアザミが残り、薬草が刈られて雑草が残る。ネズミや悪人が残って、良き人がむしろ奪われる。有能で尊敬すべき人、年代記に名のある優れた人、正しい人は、どこへ行ったのか。何人も手加減せず、大鎌で刈り行く、と豪語されたが、私は見た、互いに三千以上の軍勢が緑の荒野で合戦するのを。すねまで血につかる戦場で荒技をふるう御身は、ある者は殺し、ある者は生かした。死んだ者は下っ端の兵より身分ある者が多かった。これが公正な草刈だろうか、正しい裁きだろうか。「いやはや、神の法廷とてこれほど公正ではありえない」という最後の一句はむろん皮肉である。死神はこの皮肉に対して皮肉で応酬する。はてさて、我らは忘れておった、そちがそれほど公正な男、お偉い賢者だったとは。この世が始まって以来我らは現場にいたが、そちも全てを見知っているとは。され

ばそちの細君を永遠に生かしておいてもよかった、特別な敬意の印として。このお利口なロバめ。

ゲーテの『ファウスト』に「悪魔は歳をくっている」という一句があるが、死神は『創世記』以来の様々な例をあげて経験知(?)を誇り、乏しい経験から己の公正ぶりに疑惑を呈する相手を一挙にたたきのめそうとする。アカカーマンが現場に居たという合戦が何を指すのか、定説も推測の手がかりもない。一四〇〇年までに作者が目撃する可能性のある凄惨な会戦といえば、まずニコポリスの戦い、ゼンパツハの戦い、それにドイツ騎士団および都市同盟が関係するものが考えられるが、規模からいえばキリスト教徒軍が回教徒軍に大敗したニコポリスの戦い、地理ないし地政学的にいえばシュヴァーベン都市同盟と諸侯の戦いが有力である。もっともこれには作者の体験に基づく発言という前提があり、筆者は組みめないが『アカカーマン』を単なる修辭作品とみなせば、無用の詮索であろう。しかし筆者には、同じくもはや確かめるすべのない「ローマのさる神殿」の死神像と同様、作者はこれを実

際体験したのではないかと思われてならない。というのは作者ヨハネスはマガステルを名乗る以上、若い頃いづれかの大学で学んだことは間違いない。その場がドイツ語圏のプラハ(一三四八年創立、ヴィーン(一三六五年創立)である可能性こそ否定できないとはいえず、神学の牙城パリについてかなり辛辣な言及があるところから推すと、当時の慣例からしてたとえ短期でもイタリヤにも留学した可能性が強いからである。

作者ヨハネスのアカデミカー(学卒者)としての片鱗は、セネカやアリストテレス、アヴィケンナの言及(二〇、三〇章など)にも窺えるが、それらはいずれも死神の論拠として、換言すれば、キリスト教化された中世的禁欲の教義を代表する名前の例示である。その意味で注目されるのは二〇章で、美しい女に用心せよ云々なる、本来は教父ヒエロニムスに帰せられるべきことばが、伝本によってヘルメス(トリメスギストス)に帰せられていることだ。ヘルメス文書として思想界の伏流のように古代末期以来伝えられ、やがてバラツ

エルズスに影響を与えるこの「予言者」の名が、作者自身の誤用か写本成立過程での誤記によるものか、興味をそえられるところである。

二〇章を経たところから、アッカーマンは死神をただ糾弾するより、納得しきれぬままに肯定的回答を求め始める。この苦痛、懊悩、憂愁を、癒し、晴らし、追いやる為に、助言し、助力し、助勢し給え、いかな悪者といえど多少の善はあるものを、と。しかし死神のシニカルな姿勢は変わらない。我は万人の(命の)収税吏、そも生は死の為に創成されたり、苦悩は忘れさるべく、良き愛の思い出こそ放逐せよ、と。良き思い出が消えれば、その空白を悪しき思いが埋めよう、(妻の)肉体は滅んでも思い出は生きています、どうかもっと誠実な助言を、と求めるアッカーマンに、業を煮やした死神がたたきつけるのは、すさまじい人間罵倒、尊厳否定である。「清らかなご婦人方のお許しを願って」死神は吐き出す、人間なんぞ、罪の中に受胎され、不浄で名状しがたい汚物とともに母胎で育まれ、赤裸で生まれる、汚れた蜂房、不快、不潔な汚物、糞溜、

蛆虫の餌、廁・臭屋、汚穢桶、腐肉、かびの巢、底抜けザック、穴ぼこ袋、小便袋、貪欲な咽喉、臭気ふんぶん膠鍋、むかつく便壺……いかに美しい人もその内側は……などと読むだに聴くだに不快な一面の真実の誇張が続く。しかしこれは死神の専売特許というわけではなかった。「浮き世(フラウ・ヴェルト)」と題される寓意画は、表(面)は美しい容姿の女性が、背中は大きくえぐられ肉に蛆虫、爬虫がうごめいている姿に描かれるならいであつた。それは現世のあざとさ、醜さを強調することによって、来世讃仰の心を喚起する中世キリスト教会の定番であつた。

アッカーマンはむろん反駁する。そのような人間罵倒は創造主の冒瀆ではないか。神は万物の長として人間を定められたのだから。人間がそのように侮蔑すべきもの、悪質で不潔なものとしたら、全能の神の御手はなんとみすばらしい仕事をなされたことになるかと。人間の五官の素晴らしさ、なかんづく頭と胸より生ずる思惟想念、人間のみの有する理性を彼は讃える。人間賛歌の高揚の勢いで彼は、優位者である死神に向

かつて、あなたは人間の敵だ、だから人間の良さに一切ふれないのだ、とすら直言する。

だが死神はあくまでシニカルな現実者である。とがめたり、ののしかったり、願ったり、そんなことをいくらしても、小さな袋を満たすこともできぬ、と相手の言葉を揶揄しつつ、人間のみが行う精神活動の現れ、諸学を列挙してゆき、しかも、そんなものは我らのはりめぐらす網の前では何の甲斐もない、とうそぶく。

挙げられる諸学は、まず自由七学芸(文法、修辭、論理、幾何、代数、天文、音楽)、次が哲学で最後は法学であるが、その間に形而下学とでもいうべき、名称の奇妙な学科が並んでいる。後の自然科学の温床とでもいうべき占星術や予言術、魔術や錬金術などである。法学については、変わりやすく矛盾の多いことと、法曹人は良心のないキリスト者、なる決まり文句がつけられているが、哲学に対しては、「知恵の畑(アッカーマン)という、よろず否定する死神にしては意外なコメントがある。哲学に関しては三章後の二九章でも「賢明な師」という形容がアッカーマンの口から出ている。

医学はともかく、中世諸学の頂点としての神学がこの諸学リストから外れていることは、右の哲学の扱いとあわせて意味深長な感がある。

二七章から三〇章にかけての論議は、アッカーマンの向後の生き方を念頭においた切実な婚姻論、女性論といえよう。死神によって人間の精神的営為としての諸学の空しさを乱暴につきつけられたアッカーマンだが、悪に報いるに悪をもってすべからず、と「忍ぶの小道」を選んだ彼は、「宣誓の形で」の誠意ある助言をなお相手に求める。自分が今後いずれの「(現世の)秩序」を選ぶべきか、世俗のそれか、聖職者のそれかと。この二者択一に対する助言を求める彼の心は特に前者の場合、すなわち具体的には再婚の是非を確認することに傾いている。アッカーマンは必ずしも作者ヨハネスではないが、実は作者の父(シュトヴァのヘンスリン)はその妻、すなわちヨハネス達の母に先だたれた後、脱俗して聖職者になったものと推定されている。アッカーマンないしヨハネスはいま同じ選択の岐

路に立たされているといえよう。

迷いつつも良き妻の有難み、婦人の徳を口にするアッカーマンに対して、死神は今度は辛辣に妻女の弊害を並べたて、妻帯を否定する。曰く、妻をめとるや否や男は獄に入る如し、妻帯者は家内に日々雷雨と狐と蛇を有する如し、妻は常に夫の座を奪わんとし、騙し欺き諂い鎌をかけ愛撫反抗笑い泣きが一瞬のうちにできるばかりか、命じられたことはせず禁じられたことはせせと行う、などなど。要するに結婚生活をする男は処置無しだ、と。いささか偏見にとらわれたこのような女性観は、しかし、教父時代以来つちかわれた教会の禁欲的でアンチ・フェミニスティックな傾向を反映し極端に表現したものである。その立場からすれば、女性の理想は未婚の処女のままま神に仕えることであり、寡婦の修道女志願は次善の道、既婚婦人はもっぱら機能主義的意義、すなわち子を産み育て夫に従うものとしてのみ認められる。たとえばアウグスティヌスは結婚生活における性交の「罪」を子孫と貞節と秘蹟を理由にあげて是認するが、それは子孫育成と姦

淫防止を婚姻の主目的とする消極的でやむをえざる肯定といえよう。

肉体と精神の二元論に基づくこの教父時代以来の禁欲的男女観は、アルベルトゥス・マグヌスやトマス・アクィナスの時代になると、肉体的、能力的、発生的に劣位にあるものとしての女性観として定着する。

そしてその一方で処女性と聖母性を具現する思慕の対象マリアの崇拜が十二世紀頃より広まり、他方一〇二四年バヴィアの教会会議の結果をふまえた教皇ベネディクト八世の教勅により聖職者の独身が義務付けられるのである。特に後者に関してはアルプス以北、中部ヨーロッパの在地・在俗の教区司祭の立場は複雑だった。彼らは教区に付属する聖職禄としての農地や菜園、家政の仕事もみる必要があり、その補助者を得る意味でも妻帯者であるのがむしろ常態であったから、厳格な独身性には元来抵抗があった。結局、家政婦や賄いの形で同居者をおき、それがまた時に破戒ないし弊害となり、時にいわれなき悪評となって、聖職者の権威失墜を招いたのである。十五世紀はそのような建て前

と実態の間の緊張と矛盾が限界に達しつつあった時期であり、やがてルター派の聖職者妻帯是認と婚姻の秘蹟否定につながるといえよう。

アルブレヒト・フォン・アイブの『婚姻是非論』(一四七二年)はこのような時代背景の中で、婚姻の意義を積極的に肯定する、聖堂参事会員による啓蒙書として公刊された点で注目に値する。加うるにこの書は、『アッカーマン』刊本同様、活版印刷初期(揺籃本時代の)、知的公用語ラテン語によらず俗語ないし国民的母語としてのドイツ語の散文による書物として、またスコラ学に対する人文主義思潮の先駆的書物として注目されるのである。アイブは一四二〇年に生まれたが、エファルトやローテンブルクで学んだ後、前後十六年間をイタリアで過ごし、バヴィア、ポローニャ、パドヴァの大学で法学と人文学(フマニオーラ)を修得し両法博士となって、バンベルクやアイヒシュテットの司教座聖堂参事会員、ヴェルツブルク司教座聖堂主席助祭などを務めている。三十歳を過ぎる頃から著

作にも従事するが、当初はすべてラテン語による著述であつたものが、『婚姻是非論』を転機にドイツ語を思考と表現の手段として用いるようになり、プラウトゥスやウゴリーノの翻訳も試みられる。

あえて訳せば、「そも男子の身に妻はめとられるべきか否か」という意味のタイトルをもつ『婚姻是非論』は、治安と民政に資するようニュルンベルク市とその参事会に献呈される形をとり、この献辞のあとの本文は三部構成を成している。第一部はソクラテス、キケロ、アウグステイヌスからペトラルカに至る結婚否定ないし消極論の紹介で始まり、子の有無や貧富と女性などにふれるが、この書の中心となる第二部では子孫育成と姦淫防止という伝統的な発想を述べた上で、ポッカチオの『デカメロン』の一部翻訳（ポッカチオのドイツ語初訳）などが添えられて読者の姿勢をほぐし、「婚姻讚美」と題する第六節、そして女性の品位と優秀さを讀えた第七節が続いている。第三章は披露宴を念頭においた宴会一般論に次いで病や不運への対処にふれるが、すでに前章の斬新な印象は去り、やや散漫な

付録の感を否めない。この『婚姻是非論』の眼目ともいうべき件りが第二章第六節であるが、そこで聖堂参事会員アイブは、教会の禁欲的正統論の伝統に反し、婚姻の積極的意義を強調している。そしてその主張は、婚姻は恥ずべきことではなくむしろ名譽ある事にして、貞節の為のみならず「邦と町と家の為にも」有益であり、かつ魅力に満ちた甘美なる事なり、と要約されよう。特にこの第三の肯定理由に関連して、幸不幸をわちか合い互いにかわす父、母、子という名辭ほど喜ばしく甘美なものはあるうか、という主旨のことばがみられ、独身の聖堂参事会員のことばとしてやや意外であるとともに、そこに新しい家族観の芽生えがみられるように思われる。婚姻にイエスの祝福があることを指摘して『ヨハネ伝』の「カナの婚礼」をひいていることもルネッサンス絵画の題材との関連から興味深い。なおほぼ同時代に結婚の愚を——その意味で伝統的女性観、結婚観にたつ——皮肉な筆致で述べたフランスの『結婚十五の喜び』は、前代と異なり「目で読まれること」を前提に書かれ「文章の長文化、構文の複雑

化」を招いている事が指摘されるが、アイプの『婚姻是非論』についても同様のことがいえよう。

さて死神の痛烈な女性誹謗を浴びせかけられたアッカーマンは、俄然熱烈に女性賛美に転じ、婦人をおとしめる者は自らがおとしめられる、女性の舵取り・援助なくして幸せな進路なし、と賢者の書にあると断じ、「妻子をもつは並々ならぬ地上の幸福、この真理をもってかの慰め多きローマ人ポエティウスに、哲学の女神は(心の)安らぎをもたらした」と述べる。これは勿論ポエティウスの『哲学の慰め』を意味し、右に述べたアイプの婚姻論の主旨にも通ずるが、どうやら『哲学の慰め』第二巻第四節、獄中の作者を哲学の女神が「訪れ」、義父、妻、二人の息子という「残された財宝」を思い起こさせるくだりを念頭においているらしい。次いで畳かける勢いで続くのは、男性の徳性を高めるものとして不可欠な女性の賛美であり、まさに中世盛期のミンネザンクの呼吸である。死神はこの極端な賛美をたしなめ、蘂山を本物の山と、ドナウ河を海

と、トンビを鷹とみるようなものと揶揄し、盛者必衰、すべては無常、王者も美男美女も、勇者も賢者も、汝も諸人も、すべて去りゆくもの、ここ(地上)に残り留まるあるじは死神、とうそぶく。

三一章はこれを受けたアッカーマン最後の反論であり、攻撃である。彼は相手の論拠の矛盾をつこうとする。あなたは(十六章で)言われた、(無にして)有、精霊にあらず、生命の終わり、地上を任されたもの、と。今あなたは言う、私共はすべて去りゆき、あなたが残るあるじだと。しかし生がなければ死もないではないか、地上がすべて死に絶えれば死神はどこへいくのか。精霊ではないなら天へは昇らず、地獄へおちるのか。地上(現世)のものが、あなたが言われるほど、すべて悪質で無駄でつまらぬのなら、それは全能の創造主が無能ということになるまいか。あなたは言われた、およそ地上の生命体はすべて終わりあり、と。しかしプラトンその他の賢者は言う、あるものの崩壊は別のものの誕生、すべてのものは再生に基づき、万物

の変遷流転する作用は無限だと。

トルコ軍に攻撃されるコンスタンティノープルから亡命した学者達によって多くのギリシヤ語文献がイタリアにもたらされるまで、プラトンの著作はラテン訳の『ティマイオス篇』が西欧に知られるほとんど唯一のものだったという。またギリシヤ語原典がマルシリオ・フィチーノによって翻訳されるのは十五世紀も末のことである。『アッカーマン』の作者がプラトンに精通していたとは考えられないが、その名によって作者はここに、「最後の審判」を想定するキリスト教思想とはあいれない論拠を提示している。

三二章における死神の最後の弁論にはもはや嘲笑のけたたましさはなく、むしろ沈鬱な響きさえある。地上のものはすべて無常性の上に成り立っていること、ところが世は逆立ちしており、悪がはびこり、人は虚栄の営みを重ねている。富を得れば更に望み、略奪し戦争する。いつ、どこで、どんな風に我ら死神に捕らわれるか、わからぬというのに。すべては空しいのだ。嘆くのはやめよ。世俗・聖職いずれの身分を選ぼうと、

苦しみと空しさはつきまとう。だがそれにも拘らず悪を避け善を心がけ平安を求めよ。地上の物質より清らかな良心を。我らがそちに正しい助言をした証に、永遠なる神の裁定をおおぐことにしよう。

こうして第三章の神の裁定となるのだが、その内容は二つ、四季の争いの比喩と本来の判定である。四季の争いは、ナイトハルトの詩や謝肉祭劇などによくみられる中世後期の人気テーマで、擬人化された夏と冬、春夏秋冬が互いにその優劣を論じあうもの。アッカーマンと死神の争いもそれによく似ているが、失った者を嘆くアッカーマンも、(レーンとして)与えられた支配権を誇る死神も、いずれも神の手からそれを受け取ったのであることを忘れるなかれ、と釘をさした上で、神は裁定を下す。あるいは悲しみの故に、あるいは真実の故に、両者ともに良く戦った。告発者は栄誉を、死神は勝利を得るがよい。なぜなら、生命は死神に、肉体は大地に、そして魂は我が手に委ねられるべきものゆえ。

この三三章の後に設けられている、妻マルガレーテを悼む別章については既にふれた。筆者は最後に改めて、死神が典型的な中世的世界観、彼岸(来世)志向の立場からの現世観を代弁しているとすれば、アッカーマンは私的かつ萌芽的ではあるが、新しい世界観、此岸(現世)志向の立場を代弁すると考えられることを、指摘しておきたい。そして作者ヨハネス・フォン・テールブルがプラハの友人ペーター・ロートヒルシユ宛の献呈の手紙の中で自作を「修辞作品」と呼んでいるのは、一部に主張されるような、内容ないし思想性より形式ないし修辞技術にのみ重点があるという意味ではなく、スコラ学者の「弁証法」に代わる人文主

義の「修辞法」を意識したことばである、と考えるのである。それならば神の裁定を仰ぐのは旧態依然でおかしくはないかという反論がありそうだが、それに対してはゲーテの『ファウスト』もやや似たような、文学的虚構としての枠組みをもっていること、「否定する精神」メフィストと死神にどことなく似通った面があることを付言しておこう。ちなみに死神が必ずしも中世の亡霊とのみ言い切れぬことは、戦後文学の旗手の一人ノサックが『死神とのインタヴュー』という短編で微妙に描いている。

(一橋大学教授)